上述の如く生物組織を取らせられて、現人神とならせたまふのである。その靈化の順序として第一段が火照の點火、第二段が火須勢理の促進、第三段が終未完備の火遠理で、そして立派に現體を有せらるゝ日子穗穗手見命の御誕生となるといふのが、上掲記載の眞相である。

邇邇藝命の御名の解釋は、可なり複雜であるから之を附錄に讓ることゝし、從つて日子穗穗手見命の御名も附錄に讓ることにするが、邇邇藝命が靈の物質——物質の靈化により、現體を有せらるゝことになつて、其の御名を日子穗穗手見命と申上ぐのであるといふこと丈を述べて置く。此の如く驚くべき法則といふか、哲學といふか、以上の如きことが、お伽噺式記載中から抽出されるのである。而して是れが亦一般原則を示すものとも考へられる。然るときは、同樣の事が世界各地にも起れることなるべく、そしてそれは各地の始祖となれるものと想像される。それ等始祖中、最も優れさせられたお方が日子穗穗手見命であらせられることは、御名の解釋によつて明らかである。我皇室はそれから連綿として繼續され來れること、爰に改めて申す迄もない。

尙邇邇藝命が玉體を取らせらるゝに至つた後の御名を、日子穗穗手見命と申上ぐるのであるといふことが諒解されれば、日子穗穗手見命の御魂は、即ち邇邇藝命であらせられるゝといふ事も亦、諒解されるであらう。されば古事記には、日子穗穗手見命の御陵は、高千穗山の西の方に在る由記されあるも、邇邇藝命の御陵の事は記されて居らないのである。是れも上述見解の誤まらざる、一つの傍證とするに足るであらう。

以上で、神靈が遂に現體を有せらるゝに至つた徑路を、略ゝ明らかにし得たと信ずる。是れより以後の古事記の記載は或は顯、或は幽、遂には顯界のみの記錄となり、それには歷史的の考證を要し、此の事は、著者の任ぜんとする部門でないから、玆に此の篇を終ることにする。

結論

本書は、先づ物質科學の原理に基づいて、古事記が此の原理と、如何なる交渉あるやを檢討せるものなるが、宇宙眞の實在なるものは、單に物質のみにあらざるが爲、此の原理のみを以てしては、古事記の宇宙觀を窮むることの不可能なるを知るに至つた。續いて討究の原理を、心靈科學に求めることゝせるが、是れとて到底宇宙の深奥に透徹する原理となる譯には往かぬところがある。物質科學といひ、心靈科學といひ、共に學問として權威あることを認めながら、古事記の解釋より得たるところを、却つて此の學問の上に加ふるところがないではなかつた。是れ眞理を追窮せんが爲に、止むを得ざる態度たることを自ら信じつゝある。而して之を以て、自ら高きに據らんとするものにあらず、又之が爲に、不安の念に驅らるゝものでもなく、唯理性の命ずるまゝに、敢て此の擧に出でたに過ぎない。

顧つて、われ〳〵文化人を以て任ずるものの眼中には、何千年もの昔の人達は、蒙昧無知の徒としか映ぜぬことでもあらう。併しながら、それは多く知識方面に屬することで、純情と叡智との點に至つては、今人却つて古人に及ばざるの感なきにあらずである。現に何千年もの昔に生れた經典類が、今日猶其の光を輝かしつゝある事實は、其の消息を語るものでなくてはならぬ。之を要するに、古人は知識に昧くして叡智に優れ、今人は知識に博くして、素直に天地の聲さへ聽かざらんとする。各〻一長一短ありて、遽かに何れを是なりと斷ずる譯には往かぬであらう。

われ〳〵は所謂文化人を以て任ずるものなるが、漫に其の誇りにのみ陶醉することを止めて、謙虛な態度を以て、も一度、日本に貽されたる此の昔譚を見直し、其の有するところの、あらゆる知識を傾注して、以て其の祕庫を合理的に開くの義務があると思ふ。著者は此の覺悟を以て本書を草し、日本の原理闡明に微力を致した所存である。但其の到らざるところは、之を後の識者に待つのみである。

附

錄

答或問

問。古事記は傳說を集めたものと聞くが、其の傳說なるものは、如何にして生じたものであるか。

答。序論にも述べてある通り、個人には心と、體と、精神との三要素がある。此等三要素は、平常の場合、相互の協調を保ちつゝある。然るに精神統一狀態に置かれると、心の意識の全部若しくは大部分が蕩盡し、唯精神のみが働くことになる。即ち意識することなしに視、聽き、物言ふことを得るのである。此の如き狀態で語られたものは、廣き意味に於て、所謂神の言葉である。そしてそれが語り傳へらるれば、之が傳說となる。故に個人の精神——眞魂が優れて居れば居る程、其の傳說も亦優れて居ること言ふ迄もない。之を傳說由來の一つとして數ふ。

個人の眞魂なるものは、其の個人に、因緣的に附き副ふ無形の指導者ともいふべきもので、之を守護靈ともいふ。此の守護靈の他に、其の代理のやうな支配靈といつたものもあるが、差當り之を問題にせずともよいであらう。

此の守護靈なるものは、多くの場合、前記の如く、個人と何等かの因緣を有するもので、そ

れは一般に古き靈魂の淨化されたものである。しかし必ずしもさうとばかりは限られない。何れにしても、此の守護靈が、他の優れた神格的存在と交渉して、其の結果を傳へるならば、前よりは優れたものが得られる。而して此の事は、今も實際行はれつゝあるものである。之を傳說由來の第二として數ふ。

次には所謂神樣が、直接適當な靈媒を通じて、或は靈媒の守護靈などを通じて行はれるものである。然るに之には靈媒の素質・能力、神樣の格式等、嚴密な審査を遂げ、不純因子の混入を極力防止せねばならぬのである。そして是れは可なりの難事である。難事ではあるが、必ず守ねばならぬ鐵則でもある。此の任に當るものが所謂審神者（さにはの）であるから、審神者の任務たるや頗る重大である。然るに此の審神者：缺　ところの、所謂神示なるものが、今日臆面もなく發表され、又それが世間に信ぜられて怪しまれない現狀に在ることは、如何にその方面の智識に缺くるところあるかを語るものである。特に今日は昔の如く、語り傳へを復唱するの勞などもなく、所謂自動書記などで、自由に文字化さるゝ便あるに於て、其の弊亦甚だ大なるものがある。それは兎に角、此の方法が第三として數へられる。

第四は、所謂直接談話なるもので、是れは靈媒の發聲器官を使用せず、空中から直接發する言語を聽取して、之を語り傳へるものである。此の方式は、直接に靈媒の器官を使用せぬものであるから、潛在意識混入の虞少なく、比較的純眞なものが得られる。要は直接談話者の優劣如何に繫るのである。

此の直接談話は、如何にして行はれるものであるかについては、恐らく疑問があることであらう。それは獨立した發聲器官が、假りに空中便宜のところに作られ、それを神樣なり靈魂なりが使用して、その意思を放送するといふ仕掛けである。然らばその發聲器官は如何にして作らるゝかと問はるゝであらうが、是れは心靈科學の部門に屬するから、遺憾ながら、委細の事を述ぶべきではあるまい。

傳說由來の方式は、大體以上の四つが數へられるが、古事記の傳說が、その何れによるものであるかは明らかでない。或は單に一つの方式によるのみでなく、彼此混用されたことも思はれる。兎に角幼稚なお伽噺などでないといふこと丈はいへる。イヤ其の大部分は、優れた神樣からの放送であるに相違ない。

問。傳說は、古事記以外にも澤山あつたことは、日本書記に『或は曰く』とあるに見ても判る。それを古事記は取捨して載せたものであらう。が、その取捨は如何にして行はれたか。

答　或問

答。 それは和銅五年、(紀元一三七二年、元明天皇の第五年)太朝臣安萬侶が、古事記を献ずる序文に、

『是に天皇詔りしてたまはく、朕聞く、諸家の賫る所の帝紀、及本辭、既に正實に違ひ、多く虚僞を加ふと。今の時に當りて、其の失を改めずば、未だ幾年を經ずして、其の旨滅びむと欲す。斯れ乃ち邦家の經緯、王家の鴻基焉。故惟帝紀を撰錄し、舊辭を討覈して、僞を削り、實を定め、後葉に流へむと欲すとのたまふ。時に舍人あり、姓は稗田、名は阿禮、年是れ二十八人と爲り聰明にして、目に渡れば口に誦み、耳に拂れば心に勒す。即ち阿禮に勅語して、帝皇の日繼、及先代の舊辭を誦み習はしむ。……焉に舊辭の誤り忤へるを惜み、先紀の謬り錯れるを正さむとして、和銅四年九月十八日を以て、臣安萬侶に詔して、以て献上せしむる者なり。……』

とあるによりて知るより外なく、敢て揣摩臆測を挿むべきではない。但『僞を削り實を定め』んが爲には、單なる通常意識丈では出來ぬであらうことは、略ミ確言して誤まらぬと思ふ。

問 神樣が昔しの事を語らるゝのに、現實の人も、神も、靈魂も、區別し得ないやうな方法でなく、はつきり區別し得るやうな方法を取られなかつたことにつき、何か理由でもある事なのか。

答。 是れは著者の答へ得る限りではない。が、次のやうなこと丈は言ひ得る。

今より何千年も前の人達は、何といつても知識が幼稚である。それ等の人達に、神にも、人にも、靈魂にも一貫して通ずる、謂はゞ哲理といつたやうなものを語つたところで、之を語り傳へしむる程の理解は得られぬに相違ない。そこで天地の成るのも、神の成るのも、降つては人の成るのも、同一原則によるのであるから、現實の人なり物なりを資料として、所謂物語りを構成されたものであらうと推察される。それ故に、此の物語りの中には、現實の人としては、到底能くし得ない事まで間々挿入されて居る。これが動もすれば荒唐無稽のお伽噺視せらるゝ主もな原因であらう。が、生命に一貫する原理を認めるならば、何の不思議もないことで、却つてそこに妙味さへ見出されるのである。

古事記にはよく何々の神が、身體のどの部分で生れたといふやうな事が書いてある。が、是れは語り傳ひを記憶せしむる爲の便宜によるもので、强ひて身體の各部を必要としてゐるのではない。是れは本文にも述べた通りである。國々の名の如きも、恐らくさうした用意から、眼前のものを使用することにされたのであらう。で、身體の各部とか、國々の名とかにのみ拘泥

すると、肝腎な事が疎かになる虞が大いにある。此の點は充分心得べきことで、その心得さへあれば、問者の疑も恐らく解決されることであらう。

問。神様のことが解つたやうで、さてどこか腑に落ちないところもある。他にもつとはつきり說明する法はないか。

答。神の會得なしに、神の原理たる古事記の分らう筈がないから、著者としては、出來得る丈、諒解し得るやうな手段を取る義務がある。

先づ第一に、はつきりして置かねばならぬことは、神に普遍の神と、或る範圍內に於てのみ普遍の神、個性の神、――即ち神様の別があることである。此の個性の神は、普遍の神から發達したもので、其の神様とは、伊邪那岐命・伊邪那美命から始まる。

普遍の神については、本文にも述べた通り、われ〳〵の宇宙――太陽系を無始の始源に溯りそこから發展する順序を辿るより外に途がない。で、その始源に溯りたるものが、第三次還元の一元である。此の一元動いて二つの働きが起る。之をエーテルの働き、及原子の働きといふ此等二つの働きが合體して、更に一つの働きが起る。此の働きが所謂生命である。此の生命こそ、一切の神の働きの根本義なのである。故に神とは又生命の謂であるといへる。

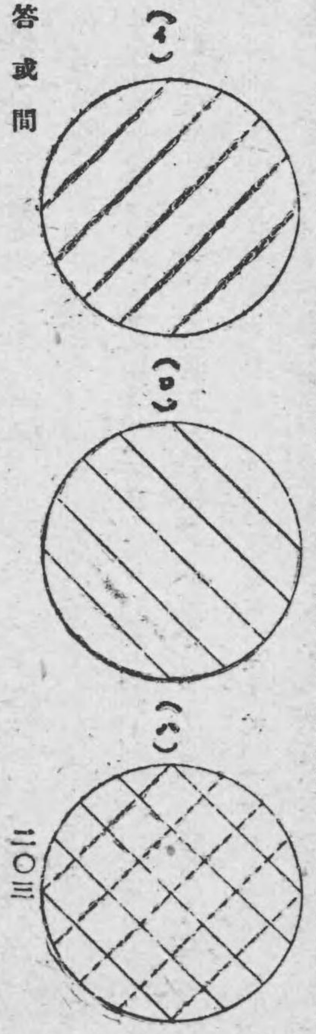
以上は古事記の根本原則であるから、是れ丈の前提は、是非共承認してかゝる必要がある。で、此の生命を生物と混同してはならない。生命は星雲時代に、既に發生したことを古事記は記して居るから、是れもその儘承認さるべきである。

さてエーテルの働き、原子の働き、生命の働きが、太陽系發展の基礎的條件であるから、此三つの働きが、太陽系の全存在を包含し得るのである。そして之を大太陽の存在と名づけることにする。

此の大太陽は、幾つかの遊星を分出するが、それは暫らく問題の外に置き、又エーテルと原子とからも離れて、主として生命について考察することにしよう。生命即ち神だからである。

而して生命は既にエーテルと、原子との働きの合成であるから、第一圖(イ)を以てエーテルの働き、同じく(ロ)を以て原子の働きを示すとせば、生命の原始組織は、當然(ハ)に示す如きも

第一圖



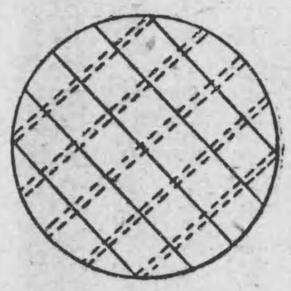
のとなる筈である。

此の生命の組織は、圖にても見る通り、エーテル波動と原子運動との合成であるから、生命なるものは、一の躍動體といふべきものであることが分る。又躍動體であるにあらざれば、生命などゝはいひ得ないであらう。本文では此の生命を、エーテル體とも名づけて置いたが、エーテル體とは、單にエーテルそのものゝ働きのみでもなく、又原子の働きのみでもなく、兩者合體の働きをいひ、之を便宜エーテル體と呼ぶに過ぎないのである。

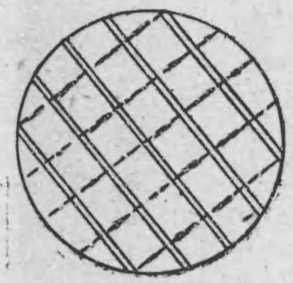
エーテルも原子も、初め簡單なものから、漸次複雜なものとなるが、生命の複雜化することも亦同樣であらねばならぬ。而して其の複雜化し、發展し行く順序は、二つの方面に分れる。即ち一は第一圖（イ）を合はせたもの、他は同じく（ロ）を合はせたものである。之を圖に示せば、前者は第二圖（ニ）の如きものとなり、後者は同（ホ）の如きものとなる。

第二圖

（ニ）



（ホ）



此の圖につき、多少の説明を加へねばならぬが、之に先だち、ヒ、キ、ギ、カ、ケ、チ等の單語は、場合により、非物質的のものをいふ時に用ゐられ、又ミなる單語は、物質的のものをいふ時に用ゐられるといふことである。前者にはすべて靈の文字を使用するを例とするが、それ等を一々區別すべき文字なき爲、意味異なる場合にも、止むを得ず一樣に靈の文字を使用することにしてある。又後者には身又は體の文字を使用することに定める。

そこで第一圖（ハ）であるが、是れは廣き意味に於ける靈――カと、體――ミとの合併したものであるから、即ちカミである。第二圖も亦其のカミたることに於て相違はないが、その構成は第一圖（ハ）に、（イ）又は（ロ）が加はつたものとなつて居る。若し之を主觀的立場からいふならば、（ハ）が（イ）又は（ロ）を誘ひ寄せたものといふことが出來るであらう。即ち第二圖（ニ）は、第一圖（ハ）に（イ）を誘靈（いさなぎ）せるもの、第二圖（ホ）は第一圖（ハ）に（ロ）を誘體（いさなみ）せるものである。而して誘靈は靈系の神、誘體は體系の神と申すことが出來るであらう。古事記の伊邪那岐・伊邪那美神の本質は、大凡以上の如き働きによるものと考へられる。

更に（ニ）は、（ハ）に（イ）を誘致せるものであるが、（イ）は説明により靈（ひ）である。故に（ニ）は、（ハ）に（ニ）なる靈（ひ）が充足した形である。故に之を靈足（ひた）りといふ。左りなる文字が之に當嵌

められるが、左りとは靈が足るといふ意味から來て居ること、之によつて明らかとなつた。

次に生命組織に、原子の働きの加はるは、四魂の和魂に於けるが如く、濁ることを意味する。故に(ホ)は(ロ)の體によつて濁り、和られたものである。即ち體和りである。今發音上ミニギリのニが省略されたとすれば、體和りはミギリとなる。更にリが省略されればミギとなる。右り或は右といふ言葉は、恐らくは、此の如きところから來て居ることであらう。

古事記に、伊邪那岐命は左より、伊邪那美命は右より天之御柱を往き廻られたとあるが、左りといひ右といふは、其の本質の働きを、その儘言ひ現はしたものと考へられる。

尙ヒタリ(靈足り)は、前の説明によりキタリ(靈足り)でもある。今、人が日の出づる東方に面して立つならば、其の左り(靈足り)は即ち(靈足り)である。此のリが省略されて北となる。故に左りも北も意味同じく、北を上位とする理も自ら明らかとなる。

尙序でながらミナミ(南)のミは體、ナはノ、次のミは右りのミであるから、東面して自體の右の方は之を南といふ。

更にヒムガシ(東)のシはソと同樣、そちらといふこと。で、人が日に向ふそちらの方を指して東とはいふ。又ヒンガシといへば、ガとは輝くことであるから、日の輝き出づるそちらの方であると解してもよいであらう。

最後にニシ(西)のニは瓊、瓊は丹き珠をいふから、日が沒せんとして、丹き珠の如くなるそちらの方が西なのである。

之に關聯して、伊邪那岐命が、『穢キ國ニ在リケリ』とある穢キとは、靈足無きで、靈氣のはれたるをいひ、又穢れは靈枯れで、生命の枯渴であることを示す。日本の原則は常に生成である。故に之に反するものは、總て醜惡となるのである。

談は少しく横路に外れたが、伊邪那美(誘體)には次の如き意味も含まる。即ち人類の初めを、假りに受胎時からとして、其の初めに在つては、寒天樣の一微粒に過ぎないのである。然るに母胎内で物質的要素を誘ひ寄すれば、重濁粗剛なる筋肉骨骼を形成し、分娩後獨立個體となつた後も、手續きは相違するが、矢張り物質を誘ひ寄することは同じである。故にわれ〳〵人類は、物質を誘ふことに於て伊邪那美(誘體)であり、又此の物質を誘ふ原因は母胎にあるから、伊邪那美(誘體)は女性をも意味することになる。伊邪那岐(誘靈)は全く之に反し、物質たる體を誘ふことなきところの生命であり、又男性をも意味する。男性には無論胎内誘體の營爲などはないのである。

更に又第一圖(八)は、普遍の生命であるから、四魂關係からいへば奇魂である。而して第二圖は(ニ)も(ホ)も、何れも普遍の生命に、(イ)及び(ロ)なる特性が加はつたものである。即ち共に幸魂である。此の幸魂には、故に男女二つの性別あることが認められる。上記寒天様の一微粒が、女子の胎内にて誘體されて或は男子となり、或は女子となる如きもので、此の理は之を誘靈にも誘體にも推し及ぼし得る。事柄が甚だしく混雜するやうであるが、何共致し方がない。但し誘靈に在つては、肉體的には誘體し得ないこと言ふ迄もない。

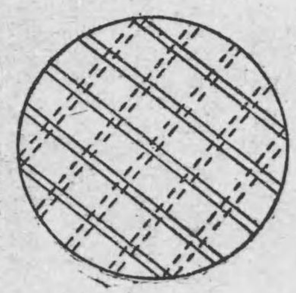
宇宙の生命組織に誘靈・誘體が行はれた後、其の生命の周圍に物質を集成するものは、常に誘體の所管である。で、大太陽の生命は伊邪那美命として誘體し、以て自轉島を生む。之と同じく其の性命の周圍に、物質的太陽を集成せるものも亦伊邪那美命である。伊邪那美命なるが故に、女性神であらせられ、地球亦之と同様、之と同様、其の性命は伊邪那美命で、須佐之男命はその眞魂――守護神であることと、本文述べた通りである。又『天照大御神、高木神ノ命以チテ』と記されあるのは、高木神が守護神であることを示し、天照大御神も常に其の守護神にお諾り遊ばさるるのである。高木神は高御產巢日神の別名なる由記されてあるが、伊邪那美命を溯れば神產巢日神、伊邪那岐命を溯れば高御產神巢日神となるから、高木神とは、父の神伊邪那岐命との混同を避くる爲、特に高御巢日神と註せるものならんと察せられる。

初め伊邪那岐・伊邪那美二柱の神は、自轉島に下られたのであるが、伊邪那美命は自轉島それ自體の生命として、又伊邪那岐命は其の守護神としてゞあつて、個體性命と、守護の性命と相伴なふことは、蓋し天地の原則である。されば われ〳〵人類に在つても、個體性命あると同時に、之に伴なふところの性命があるのである。われ〳〵は之を守護靈と稱しつゝあるが、此の守護靈は、男子には男性の守護靈、女子には女性の守護靈なるを常とする。併しながら、人が一旦死の關門を潛れば、その指導に當らるゝは、男子・女子の別などなく、常に男性神であることは、幾多の實例によつて確實である。是に觀るときは、男性・女性の靈魂が、生時に於ける男子・女子の守護靈となつて居るのは、伊邪那岐系守護神の代理を、便宜勤めしめられて居るのだと解してよいやうである。

第二圖の一般説明、及び之に附隨せる事項は、以上の程度に止め、次に主として、(ホ)について説を進めることにする。(ホ)は既に述べた通り、大太陽の生命――誘體である。大太陽その物は、遂に幾つかの遊星を分派して、太陽及び遊星から成るところの太陽系を形づくるが、其の生命にも亦前述の原則により、再び誘靈・誘體が行はれる。之を圖示すれば第三圖(ヘ)

(ト)の如きものとなる。しかも其の靈體たることに於て異なるものではない。若し靈體を上下顚倒して體靈とせば體靈即ち道ともなる。易の繫辭傳に『一陰一陽之を道といふ。』とあるのも道の根本は、遂に陰陽交渉以外になきことを語つたものであらねばならぬ。

第三圖

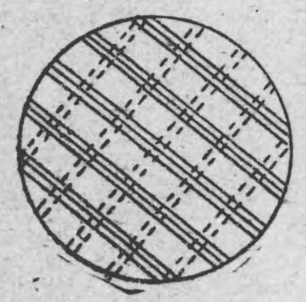


(ト)

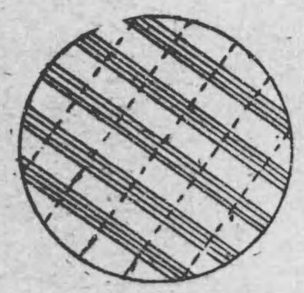
之と同樣、(ト)に誘靈・誘體が行はるれば、第四圖(チ)(リ)となる。誘靈については、前と同樣之を省略することにする。

第四圖

(チ)



(リ)

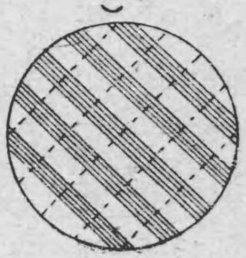


以上考察せる順序より推して、第一圖(ハ)は普遍の生命たる宇麻志阿斯訶備比古遲神。第二圖(ホ)が大太陽の性命。第三圖(ト)が太陽の性命。第四圖(リ)が遊星の類型性命を表徵するものとなる。

是れより以後の性命は極めて複雜、圖などを以て到底示し得らるべくもない。但し地球生物の生命の一般形式としては、第五圖(ヌ)に示す如きものとなるであらうと察せられる。但し誘靈にも誘體にも、普遍の生命第一圖(ハ)は、自然加はり居るであらうこと必定で、然るときは(ホ)(ト)(リ)共に、圖に示されたものより、更に複雜したものとなるであらう。

第五圖

(ヌ)



此の圖について見ると、生物の生命には、漸く物質の働き(ロ)が加はり來つたことを知り得べく、そしてそれがやがて和魂となるものである。此の和魂に更に細胞的物質が集成されることになり、そして荒魂としての生物體が出來上がる。これが一貫した生成の原則である。但し

天地開闢して生物の發生となる迄には、幾千萬年とも知れぬ年數を經過したことなるべきも、既に生物となれば、最も簡便巧妙な手段によつて、生成增殖の業が行はれつゝあること、人の知る通りである。

さて上述する如く、誘靈も誘體も、何れも靈體・火水・陰陽であり、之を神といふ。然るに誘靈も誘體も、普遍の生命から、遂には或る相貌を有せらるゝことになるが、その相貌なるものは、一の光明體であるといふ。故にカミとは則ち赫(かがや)く身であることをも示す。人類の靈魂でも既に一の光輝體で、靈魂が淨化されるに從ひ、益々其の光りを增すことは、實驗上にも見られる。されば誘靈が赫灼たる光明體であること、幾ど疑ふの餘地すらない。神即ち赫身(かみ)で、第六章に引用せるマイヤースの言も、亦之を裏書きするに足るものである。

問。 水蛭子と淡島とは、靈の物質化の失敗であるといふが、それはどういふことか。

答。 心靈現象は種々あるが、其の中に靈の物質化現象といふのがある。第八章に於ては、物質の靈化といふ方當る由述べて置いたが、何れにしても、靈が假りに物質類似の形態を作るのをいふ。然るに此の假りの形態は、光線に逢へば直ちに崩壞するを常とするが、經驗を重ねるに從ひ、赤色光線・綠色光線にも、更に白色光線にも堪へ得られるやうになる。是れは一靈魂でさへも、能くするところであるが、神の偉大なる力を以てせらるるならば、完全な物質化が行はれ、人類を或る時代に、諸所に發生せしめたのであらうと想像される。是れも第八章に述べた通りである。而して之が爲には、それ迄進化し來れる生物の幽素を、必ず使用されたことなるべく、進化論では、人は猿より進化したものゝやう說くが、實はそれ等の幽素を使用せるものであらねばならない。幽素を使用するが故に、物質的にも似たものとなることに不思議はないのである。

それにしても、此の物質化を固定せしむることは、神の偉大なる力を以てするも、可なりの難事と見え、水蛭子・淡島等再度の失敗を重ねることにもなつたのであらう。

問。 是れ迄の說明により、伊邪那岐・伊邪那美二柱の神については、一應承知することとするがわれ〳〵日本人としては、天照大御神と、須佐之男命との盟に、合理的の說明が下されんことを望んでゐる。それは古代のお伽噺樣のものであつてはならぬからである。

答。 此の事は本文でも、出來る丈の說明を惜まなかつたが、何としても神の世界の事であるからなか〳〵困難が伴なふ。マイヤースは、『想像の雰圍氣に宿る。』といつて居るが、われ〳〵も深く想像の雰圍氣に立ち入る覺悟を以て、此の事を研究しなくてはなるまい。

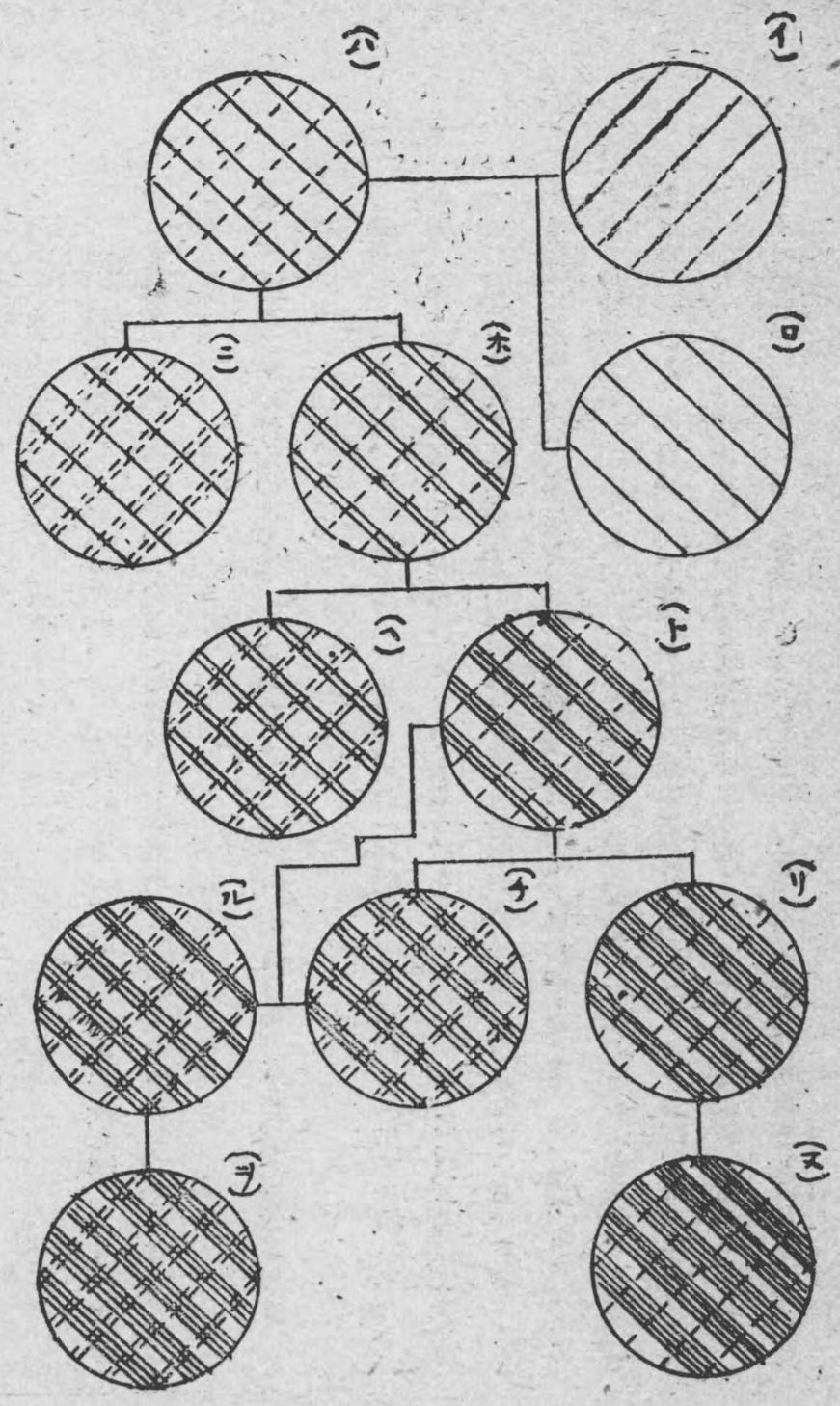
が、著者は此の際、前掲の諸圖を一括することによつて、一の系統圖を作成し、それによつて、此の寮圍氣の一端の概念構成に充てんとしつゝある。次頁の版圖即ちそれである。

此の版圖に於て、(イ)は高御產巢日、エーテルの働き、(ロ)は神產巢日、原子の働きを示すものとす。(ハ)は此の二つの働き組合はされて、比古遲神の生命素となることを示す。此の生命素に誘靈・誘體が行はるれば、大太陽の性命(ホ)が成る。そして其の眞魂——守護神は(ニ)である。

此の(ニ)は誘靈であるが、之について想像を逞しうすることは、餘りにも空理に走る嫌あるを以て、その考察は差控へることゝし、(ホ)の誘體の方面のみを、主として考へることにしよう。そこで、(ホ)に再び誘靈・誘體が行はれたものが、(ト)(ヘ)として圖に示されてある。此の(ト)が太陽の性命で、(ヘ)は其の眞魂——守護神なのである。而して是れ即ち高木神であらせらる。

此の太陽性命に、三たび誘靈・誘體が行はれて(チ)(リ)となる。此の(リ)は遊星の類型性命なるが、此では單に之を地球性命に限ることにする。そして(チ)は其の眞魂——守護神なること前の通りである。此の守護神即ち須佐之男命である。

地球の性命(リ)に、更に物質の働き(ロ)の加はれるものは(ヌ)であるが、此の(ヌ)は一般に



地球の生物の生命と考へることが出來る。

太陽の性命の表徵としての(ト)は、畏しこけれども、天照大御神を表徵し奉れるものとして考へられたい。然るときは、(ヘ)はその眞魂――守護神――高木神を表徵すること前に述べた通りである。

又(リ)なる地球性命の眞魂――守護神は(チ)で、此の(チ)は須佐之男命を表徵すること、是れ亦前に述べた通りである。

爰まで述べ來れば、天照大御神と、須佐之男命との盟は、(ト)及び(チ)にて表徵されたものゝ御合體であらせらるゝことが諒解されるであらう。そしてそれは、(ル)によつて表徵される。

此の新たに生れられたる生命の代表神は、正勝吾勝勝速日天之忍穗耳命であらせらるゝことは、本文にて既に承知の筈である。『正勝吾勝』とは、須佐之男命が、『自カラ我レ勝チヌト云ヒテ』とあり、須佐之男命が勝たれたといふことである。須佐之男命が勝つといふ意味は、『速日』であるからである。速日は速火で電光をいひ、此の電光を起すところの生命は、天班馬の龍である。而してそれは須佐之男命の性命の現れに外ならぬこと、本文にて既に知る通りである。

そこで圖を一覽するに(ル)は、(ト)と(チ)との合體から、重複を省略せるものであることが分る。そしてそれは(チ)と全く同一である。即ち實質的に(チ)が勝つて居ることを語る。是れ『勝速日』といふ所以である。

『忍』は愛しで美はしき意味。『耳』は御身、『穗』は秀で抽んづること。故に『忍穗耳命』とは、容相の優れて美はしき體を有せらるゝ性命と解釋し得られる。そしてそれは龍身であらせられるのである。但し御身とあつても、之を現象世界の事として、現體を有せられたと解すべきではない。今われ〳〵はまだ所謂想像の雰圍氣中に住しつゝあるからである。

次に『天邇岐志國邇岐志天津日高日子番能邇邇岐藝命』の御名を解釋すべき順序となつた。先づ圖に就いて見るを便とする。邇邇岐藝命は、忍穗耳命の御子、而して後には現體を有せらるゝ機緣とならせられたに鑑み、その御生命は、(ヲ)にて表徵する如くならせられたと拜察し得られる。で、『天邇岐志』は、天和ぎしなるべく、天とは(ヘ)にて表徵する天照大御神の眞魂であらせらるゝと拜察される。和ぎとは、物質の働き(ロ)の加はることとなるを以て、當然(ル)にて示す如きものとなる。而して(ル)は又須佐之男命――地の眞魂たる(チ)と同一である。縱令內容の由來異なるとも、其の生命が同性質のものであると考ふることが出來るであらう。故に(ル)は又地――國の性命である。之に和ぎして(ロ)の加はれるは、取りも直さず國和ぎしであ

る。そしてそれは(ヲ)にて表徵する如きものである。之を邇邇岐藝命の御性命の表徵と考へることが出來るのである。

『天津日高』とは、その天に在しますことを示し、『日子』とは天照大御神の所生であらせらるゝことを示し、『番』は前にも述べた通り、優れて抽んづること。故に日子番とは、數多き日子の中に在つて、最も優れさせられた性命であるといふこと。『邇邇藝』は和ぎ和ぎで、天和ぎし國和ぎしを重ねて明らかにされた御名であると拜察される。

以上を重ねて申すならば、邇邇藝命の御名は、天津神の和魂たる國津神の、其の又和魂であり、そしてそれは最も優れた、天地を兼ね、萬物を總統せらるゝ、絶對優越、無二の御生命なることを示す。而して此の和和(にに)ぎであるところの、(ヲ)にて表徵さるるところのものは、其れ自身に於ては、無論幸魂であらせられ、其の天降に當つては、『天之浮橋ニ浮キジマリ』て、玆に和魂とならせられたこと、本文說く通りである。

次に邇邇藝命が現體を取らせられた御名、天津日高日子穗穗手見命の御名を解釋す。『天津日高日子穗』は前說の通り、『穗手』は秀(ほで)出、『見』は體(み)であるから、結局天に在しまして、最も優れた生命が、優秀なる玉體を取らせられて、荒魂とならせられたといふことである。即ち邇邇藝命が第八章に述ぶる手續きにより、玉體を取らせられた御名が、穗手見命と申上ぐるのである。此くて荒魂を取らせられた以上、その御壽に限りあることを免れないのは極めて自然の數なのである。

以上の如く御名を解釋し來れば、古事記が擬人法により、生命——神——魂について語られたものであることが判明するであらう。それ故に之を神代といふ。神代とは決して古代といふ意味にあらざることも亦、諒解さるべきである。

邇邇藝命が玉體を取らせられて穗手見命となられ、從つて御魂の神として今も猶そのまゝ、天照大御神の依さし賜へる御天業を、主として日本國民の自覺に待ち、歩一歩進行されつゝあると拜察されるのである。われ〳〵日本國民たるもの、豈努めざるべけんやである。

日本天皇が何故世界に君臨されねばならぬかは、天地の神の約束であると察せられるから、人類はそれに聽從するより外はないのである。是れは人爲的工作施爲などを以てして、どうともなるものではない。自然の法則、惟神の大道は、超然として此等人間の上に臨んで居る。

問。 日本天皇と申上ぐれば、神武天皇は、人皇第一代であらせられるが、神武天皇の御事について、何か承はり置くべき事はないか。

答或問

答。神武天皇の御名は、書紀には『神日本磐余彦天皇』と記され、カミヤマトイハアレヒコノスメラミコトと申上げられて居る。又古事記には『神倭伊波禮毘古命』と記され、カムヤマトイハレビコノミコトと申上げられて居る。著者は此の二つを見比べて、カミヤマトイアレヒコノミコトと申上ぐべきであると考へつゝある。イハレはイアレの音便によるものなるべきことは、ヒコをビコと發音するが如きものである。

先づイアレのイは接頭語で、之には意味がない。アレは現れで、出現のこと。ヤマトのヤは彌。マは益すのスが詰まれるもの。トはヒト即ち人なるを以て、ヤマトは彌益人が、發音上ヤマトとなれるものである。

祝詞には『天之益人』なる言葉があり、又古事記には本文記載の通り、伊邪那美命が、日に千人絞り殺さんと申されたに對し、伊邪那岐命は、日に千五百産屋立てんと申された由記されてある。此事については、本文既に述べたところで、諄々しく述べる必要もないことである。兎にも角にも、彌益人は生成の神律なのである。此の神律に副ふことの出來なくなつた國は、衰亡を免れないのであるから、日本は金輪際そんな事になつてはならない。

神武天皇は人皇第一代に在しまし、その御名は、此の神律を如實に示されたものと拜察される。即ち神が彌益人として出現されたところの日子――天照大御神の御子孫たる天皇と解し奉ることを得るのである。而してヤマトには、別に大和の文字が當嵌められてあり、天皇の都を奠められたる地を大和の國と稱するにも、深き理由のあることである。といふのは、君臣・父子・夫婦・兄弟・朋友を初めとし、鄕黨・社會・國家、廣くは世界全般に亙りて大いに相和し相助け、共存共榮するにあらざるよりは、人類の增殖――彌益人とはなり得ないからである。然るに世界の狀態は如何。互ひに相排擠し、相殘害し、天理人道を無視して、只管自利のみ是れ圖り、到る處を修羅の巷と化しつゝある。われ〳〵日本國民は、皇紀二千六百年を契機として、天皇の御名によつて示されたる大義を、世界に宣布徹底せしむるの覺悟あることを要する。恰も好し、それは昭和の御代である。昭和の二字が、如何なる出典であるかに論なく、昭和とは大和を昭らかにして、之を世界に輝かすといふ意味に解し得られるので、昭和の二字、決して偶然ではない。

序でながら一言する。從來大和魂なる言葉の意味が種々解釋され居るが、未だ定說に達せぬ感があるといふことである。然るに大和が彌益人であるならば、その意味するところが、可なりはつきりすると思ふ。即ち彌益人ならんが爲には大和たることを要し、大和とは君臣義あり

父子親あり、夫婦別あり、兄弟序あり、朋友信あり、鄕黨・社會・國家・世界全般が約を履み正しきを行つて、大いに協和することの謂である。而して其の中には、人倫道德のあらゆる德目が含まれ、その實行が要求さるゝのである。此の如くして、世界は始めて共存共榮し得ることになるのである。故に若しも此の大和に背反することあらんか、人も國家も、神律悖反者としての運命の重課を免れぬことになるのであらう。

更に彌益人は、禊祓の神律に基づく。此の事については、本文に述べた通り、己れを正しうして、他の惡が來り侵すあらば之を拂ふといふのである。それは取りも直さず尙武である。尙武ならざれば惡を克服し得ず、惡を克服し得ずしては、彌益人としての功を遂げ得ないのである。大和魂を武士魂なるが如く解せんとするは、此の一方面のみからの觀察に過ぎない。武士魂が大和魂の重要なる要素たるには相違ないが、その本義は以上述べた通り、更に廣き意味が含まると心得べきである。

尙神が如何にして彌益人として出現されたかは、簡單ながら既に說明したところであるから是れ以上は自ら其の部門に就て研究さるべき問題である。

問。 古事記には、例へば天兒屋命は、中臣連等が祖なりなどといふ記載がある。是に由つて觀るときは、天兒屋命及びその他の神々は、單に魂その物ばかりをいふのではなくして、現體の所有者であつたこと、今日の人と異ならぬのではないか。

答。 邇邇藝命が天降らるゝ時、天兒屋命等は、伴の緒、即ちお伴の玉緒——生命として降つたのであることは、前に述べたところによつて諒解されたことと思ふ。それは版圖によれば、(ル)(ヲ)の傍系と考へれば宜しいのである。而して邇邇藝命が、玉體を取らせられたと同樣、此等性命も亦、現體の所有者となつたことに疑問はない。で、皇室の御先祖が邇邇藝命の御生命でありしが如く、中臣連等が祖先も亦、天兒屋命と稱する生命であつたのである。

此の如き生命——魂を有するものが、所謂天孫民族である。之を要するに人の肉體は、之を荒魂といひ、心は之を和魂、幸魂といひ、共に之を稱して魂といふ。既に序論にても述べた通り、古事記は常に四魂共通の筆法を用ゐて居るから、此の事を念頭に置かなくてはならない。又此くすることにより、一つの事柄を序して、幾つかの內容をも包含せしめ得る便がある。われ〳〵は自己認識の到らぬ罪を、古典の序述に轉嫁するやうなことをなしてはなるまい。

問。 版圖に在る如く、(ヌ)が地球の生物生命の類型であるといふなら、それは人類生命の類型でもあらねばならない。然るに天兒屋命等の生命が、又人の魂とせば、そこに矛盾を生ずること

になりはせぬか。

或る生物學者が、一人の死刑囚の心臟を、死刑執行後十一時間を經たる後、之に人工的液體を注入せるに、心臟は復活して、其の固有の運動を始め、三時間餘の研究に堪へたといふことであるが、是れは單に心臟のみではなく、適當な手段方法を講ずるに於ては、他の臟器にも同樣な事が行はれる筈である。龜の如き冷血動物などになると、數週間も活動せしむることが出來るといはれる。

此の事實より推し、人類の腦も亦獨立器官として、其の處置宜しきを得れば、所謂意識的動作をなさしめ得るであらうと思はれる。果して然るならば、人類は他の何物をも待つことを要せず、自家の肉體組織その物のみを以て、生物として生存し得るやう考へられる。

以上は直接古事記の問題でないかも知らぬが、密接な關係があるものゝやう思はれるから、説明の勞を取られたい。

答。苟も生命に關する事柄である限り、亦本書研究の範圍に屬するものである。よつて逐次所見を述べることを吝むものではない。

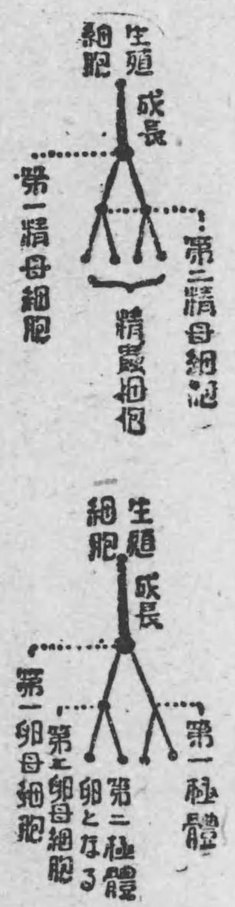
疑問として擧げられた各臟器であるが、各臟器には臟器の生命があり、他に待つことなしに個體と離れても、或る期間生存すべきことは認められる。加之其れ等臟器を構成するところの、個々の細胞にも亦生命があつて、或る時間內、それ等臟器と分離されても生存し得る。併しながら此の個々の生命は、必ずしも各臟器の生命ではない。科學的には、何れの臟器を構成するところの細胞も、皆同一なのである。で、各臟器には臟器の生命あつて、此等細胞を綜合同化する。之と同樣、此等臟器を綜合同化するは、個體の全生命なのである。

凡そ人の生體を構成するところの細胞――正しくいへば原形質であるが、此の原形質なるものは、寒天樣の物質であるが、其の中には二十三對と、長短二箇、都合四十八箇の染色體なるものがある。而して此の細胞は、隨所に僞足を出して食物を攝取し、倍又倍と分裂增殖する、これが細胞箇體が具備する本能の一つである。

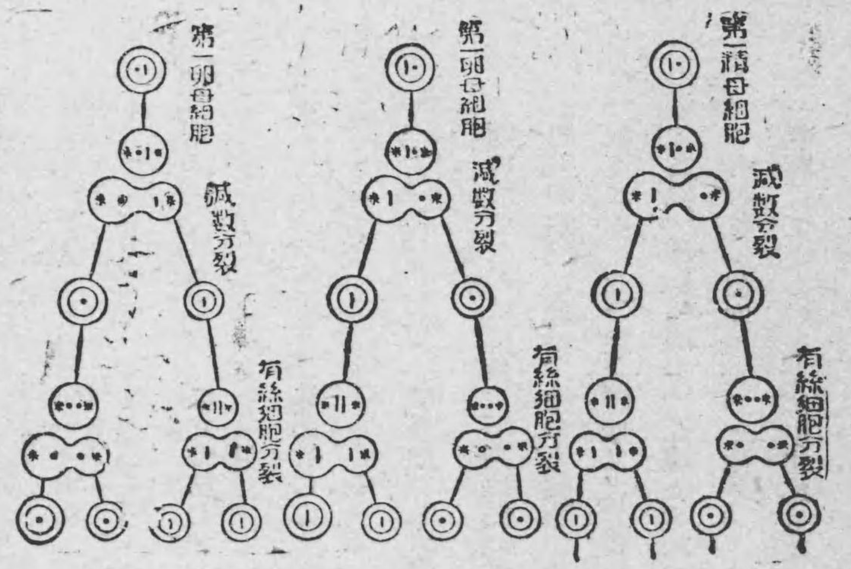
細胞は此く分裂して倍加增殖するが、生殖細胞であるところの精子、及び卵細胞は、減數分裂をなし、その結果、二十三箇と、長又は短の一箇より成る、都合二十四箇の染色體しか有せぬものとなる。それ故に、精子と卵とが合體するにあらざれば、完備せる細胞とはなり得ない。此の分れて合せんとするものが、又一つの本能なのである。是れより少しく此の生殖細胞のことについて述べる。

生殖細胞の初生は、之を生殖始源細胞といふ。此の始源細胞は、男性に在つては精原細胞、女性に在つては卵原細胞となつて分裂增殖する。此の增殖せるものは、營養分を攝取して次第に增大する。之を各第一精母細胞、第一卵母細胞といふ。此の第一精母細胞、第一卵母細胞には所謂減數分裂が起り、前者は二箇の第二精母細胞となり、更に分裂して四箇の精蟲細胞となり、それより或る變化を經て精蟲となる。

後者の第一卵母細胞も、前者と同樣の過程を經て減數分裂を起す。その結果は第二卵母細胞及び第一極體なるものとなる。此等にも何れも分裂が起り、前者分裂の一つは其の儘卵となり他は第二極體なるものとなる。第一極體にも分裂が起つて二つとなるが、此の二つのものは、第二極體と共に消滅する。故に第一卵母細胞からは、唯一箇の卵しか生じない。之を左圖に示す。



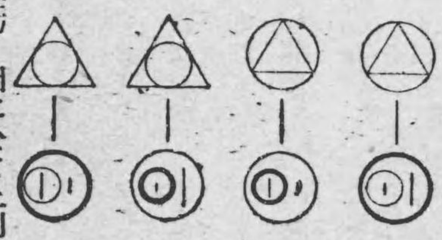
前述減數分裂とは、人類の細胞には、四十八箇の染色體あるが、分裂の結果、對をなすところの



二十三對が分れて二十三箇となり、之に對をなさざるところの、長或は短の一箇が加はつて、半數の二十四箇となるをいふ。是れ亦圖に示すを便とするが、二十三箇は共通であるから之を略し、單に長又は短の一箇丈を圖には示すことにする。

然るに第六章に述ぶるが如く男性性命は△女性性命は◎を以て示し得るが故に、此の細胞組織と生命との組合せは、次の如く、四つの類型を以て示すことが出來る。上記の場合に於て父母細胞の何れかゞ、比較的發育優れるものがあるとの推定の下に、之を示すに重厚な線を以てし、又下等生物の實驗に於て、染色體長き方發達すれば雌となり、短き方發達すれば雄となる事

實は、普く之を生物に推し及ぼし得る筈であるから、圖には此の事實をも取り入れて示してある。



は女性にして母系體質

は女性にして父系體質

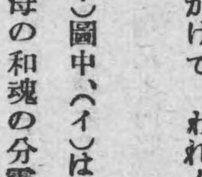
は男性にして父系體質

は男性にして母系體質

〔註〕圖に於て上列は性命、下列は細胞の結合で、外圓は卵、小圓は精子を示す。

以上四つの類型に於て、性命と細胞組織とは、兩々相待ちて發達し、以て新らしき個人となるのであるから、此の生命體は又之を新魂（あらみたま）といふ。若し嚴格な區別を必要とする場合には、生命の方は新魂、細胞體の方は荒魂とすれば、紛れるやうな憂がなくて濟む。が、是れは今のところ、一つの提唱程度に止めて置く。

此の荒魂に生命あることは申す迄もなく、從つて各臟器、各器官にもそれ〴〵の生命あつて之を統轄し、又それ等の總てを統轄するところの生命があつて、そが所謂新魂なのである。此の新魂は主として大腦組織に働きかけて、われ〳〵の通常意識となる。例によつて、左に之を圖示す。



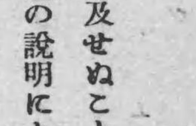
此の（甲）圖中、（イ）は前掲◬の如き父の和魂の分靈。（ロ）は同じく◬の如き母の和魂の分靈。而して父母が此の分靈を出し得る機會は、細胞の合體を條件として、茲に（ハ）なる新らしき和魂の創生となる。故に和魂は又賑き魂で、繁榮の意味もあることになる。われ〳〵の生命に關する解釋は以上の如きもので、縱令大腦組織が活きて居ること、彼の心臟の如くであると雖も、此の和魂の（ハ）がそれに印象づけるにあらざれば、決して意識として現れないのである。

問。われ〳〵の意識については、是れ迄の說明で、一應諒解して置くことゝして、さてわれ〳〵の行爲を支配するものは、單に此の意識にのみよるか。それとも何か他から或る種の干涉を受けるものか。それを明らかにされたい。

答。われ〳〵には、意識以外、或る何物かゝ作用しつゝあると考へられる。そしてそれは小腦方面である。此の小腦なるものは大腦に比して、酒精に醉ふこと速かで、直ちに麻痺して了ふ事

實がある。即ち意識がはつきりして居りながら、身體の統制を失ひ、千鳥足などになり、之を笑止に思ひながらも、どうともならぬ場合がある。是れは小腦に作用しつゝあつたものが、小腦組織が麻痺して其の用を爲さなくなつた爲である。而して此の小腦に作用するものは、胎兒の分娩後或る期間を經て、此の胎兒に、運命的に附き副ふ他の靈魂――眞魂――守護靈なるものであることが、明らかとなつたのである。尤も直ちに眞魂――守護靈にあらずして、之が代行に任ずるものもある。此の代行するものを支配靈と呼ぶを例とするが、それを云々することになると、事が極めて複雜となるから、暫らく上記の如く定めて置く、そして之を圖示するならば、(乙)圖の如きものとなる。

(乙)



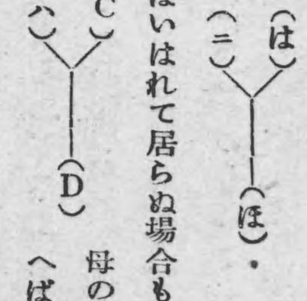
此の圖の(ハ)は胎兒の和魂――自我靈。(ニ)は例の守護靈、(ホ)はそれ等の合併であるところの、普通の心である。

尙此に附け加へるが、(ハ)は◎又は◬符を以て示さるべきものであるが、前には混雜を避けて除外して置いたところの、土地の魂にも同時に影響されるといふことである。それ故に土地異なれば、◎も◬も多少異なつた性質となるものである。尙是れは單に土地の影響を受くるに止まらず、宇宙間には種々の線があつて、それ等の影響を同時に受けること必定であるが、そこ迄は言及せぬことにしよう。

問。 是れ迄の說明によると、佛敎などで熾んに唱へられる、再生といふ事が認められぬことになりさうである。問題がだん〳〵横路へ外れて行くやうであるが、再生問題は、如何なる解釋となるか。

答。 再生は俗間信じられつゝあるやうであるが、著者の研究するところでは、全部の再生などは有り得ないと思ふ。此の再生が唱へられるのは、多くの場合、幼兒が死亡し、その幼兒がどこか他に再生したといふやうなことがいはれて居るに過ぎない。が、その解釋は次の如きものである。

(乙)圖に於て、(ニ)は(ハ)の守護靈であるが、(ハ)の肉體が死亡せる結果、此の同じ守護靈が、(丙)圖(い)(ろ)なる父母によつて生ぜられたる、(は)の守護靈となること、(丁)圖に示すが如くなつたとすれば、幼少の時は、(ハ)、(は)の和魂――自我靈、及び之を顯現するところの肉體組織未發達の爲、主として(ニ)の影響を受け、(乙)圖(ホ)と、(丁)圖(ほ)とは、宛も同一人であるかの如き印象を與へることになるであらう。そしてそれが再生說を由來することになるのである。故に再生說は、個體と自我靈とが未發達のうちに限られるのである。



之と趣を同じうしながら、再生とはいはれて居らぬ場合もある。即ち(戊)圖(A)(B)なる父母の分靈として(C)を生じ、此の時例へば(甲)圖(ハ)が靈魂となつて、或る歳月を經過して淨化し、その守護靈となること、(巳)圖の如きものとなつた場合は、之を(ハ)の再生とはいはず、單に之を守護靈と呼ぶ。

尤も(甲)圖(ハ)と、(巳)圖(D)とが、從令肖似するところがあつたとしても、時代が隔り居る爲、比較もなし得ないのである。唯時として、誰々の再來だなどゝ言はるゝことあるが、それは餘程顯著な場合に限られ、普通は單なる守護靈たるに止まる。

問。 新らしき和魂――新魂、及再生の說は、之を聽くことを得た。が、も一つ問題が殘つて居る。それは外でもない。宿命と運命との關係である。

答。 之について著者は、昭和八年四月、雜誌『心靈と人生』誌上に意見を發表して居り、大概それに盡され居るやう、今も猶思ひつゝある。よつて左に其の大要を摘記することにする。

運命と宿命とに對して、先づ次の如き解說を與へる。

運命とは、偶然的の出來事が、必然性を帶ぶるに至つた場合の境遇。

宿命とは或る原因から、必然的に享受するところの境涯。

といふことである。爰に偶然とは、豫期或は豫定されて居らぬことをいふ。上述われ〳〵の發生徑路に於て、新らしき個體と、新らしき魂とが生ずるのに、豫期又は豫定といふ如きものは一切無いのである。生物學者の說くところによると、雄細胞の一つが結合さるゝは、二億箇中の唯一箇であるに過ぎず、又雌細胞は、何年かの中の唯一ケ月に過ぎない。今mを何年間かに於ける月の數。nを毎月の結合機會とすれば、新らしき個人の發生する機會は、

$$\frac{1}{2{,}0000{,}0000\times m\times n}$$

といふ、途方もなき偶然率から出發するのである。然らば此の事實を、何人も豫期或は豫定の計畫だとはいひ得ないであらう。

今個體方面のみについていへば、例へば雄細胞をイ、雌細胞をロとし、新生體をハとするにイが、イ′イ″イ‴……であり、ロがロ′ロ″ロ‴……であり、從つてハがハ′ハ″ハ‴……であつても差支なかつた筈である。然るにどれでもよい筈の雄細胞がイであり、雌細胞がロであり、從つてハとなつたのであるが、此のハは既に他の何物でもなく、私なら私といふものに確定したのである。

これが私のいふ運命である。

此の如き運命を有するものは、當然父母、溯つては祖先を原因とし、更に守護靈などの影響も受けるところから、偶然享受するところの運命は、併せて宿命を負荷せねばならぬことになる。

然らば一旦享受せる運命は、之を開拓することなど不可能であるかといふに、是れは必ずしも一概にはいへない。われ〳〵は獨立個體として、ハからは脱し得ないが、併しながら、獨立個體なるが故に、如何なる境遇にも處し得る自由がある。そしてその範圍内に於ける撰擇は、亦甚だしく偶然性に富むものである。故に又之に運命なる刻印を印し得る。若し前者の逃れ得ざる運命を第一運命と呼ぶならば、後者の可變性運命は、之を第二運命と呼ぶことを得るであらう。そして此の第二運命は、個人の努力と修養との如何により、其の攫得さるゝ偶然性を異にし、從つて如何樣にも開拓さるべき可能性がある。われ〳〵は如何なる第一運命の享受者であつても、第二運命の優れた開拓者とならねばならない。又此くすることによつて、子孫の宿命に、よい機緣を貽することにもなるであらう。

問。是れ迄の說明により、略〻諒解し得たことは、宇宙は陰陽の交渉から發展し、物質と非物質との二つに分れ、生命の萠芽となり、此の生命は、生物の生命と、神樣との二分野を爲し、神樣は永遠の生命として存在せらるゝが、生物の生命は、死なる過程を經て、神樣類似の永遠性になるといふことであるらしい。事は極めて簡單であるが、其の現れる象相は必ずしもさうは往かない。否、甚だしく複雜怪奇なものともなる。世の經典なるものは、此の複雜なる象相に處すべき所以の道を敎へんとして起つたが、未だ眞の簡單な一道に達し得ないが爲、億萬言、人をして五里霧中に彷徨せしむるの感なきを得ない。是れが問者の諒解するところであるが、之に對して、何か說あるならば承知したい。

答。大體に於て、問者のいふ通りである。尙著者として、一言を費すことにしよう。即ち天地の法則、自然の大道、一貫の眞理といつたものゝ甚だ簡單であることは、改めて申すまでもない。が、此理に到達することの至難なるも事實である。其の然る所以は、側面觀察のみに走らんとするからである。例へば人の道なるものは、唯一つ誠の心があればよい筈であるが、之を說明せんとすれば、君に對し奉つては忠、父母に對しては孝、兄弟姉妹に對しては悌、朋友に對しては信、社會に對すれば義、廣く人類に對しては愛、其の他何々には何々、そしてそれ等忠孝悌信……等に對しては、又それ〳〵の說明解釋があるといふ風で、說明解釋益〻細密を極

めて、道益ゝ暗しの歎を發せざるを得なくなる。」

我國は元來言擧げせぬ國であるが、それでありながら、道自から行はれたのである。然るに經典なるものは、言擧げして、煩簡道を異にするものとなり、『大道廢れて仁義有り』との歎を發するものさへあるに至る。言擧げ必ずしも道を盡さず、既に道を體すれば、言擧げの要などはない。然らば道を體するの道如何といふことになるであらうが、それは結局自家の和魂をして、その幸魂を發揮し得るやう仕向けて行くといふ一事に盡きる。此の事は序論系統圖を一覽しても分ることであるから、玆に言擧げの煩を敢てしない。

さうなつた曉に於ては、外物の如何なる事にも、その魂相應に處し得るのである。此の事たるや極めて簡單、蓋し百萬言を空しうし得るものである。

問。 和魂を洗練すれば、幸魂の發露となるが、和魂中には、佛家の所謂執着心・煩惱心があつて之を抑壓することは可なり至難であるらしい。特に煩惱心は、百八煩惱ともいはれる程で、可なり厄介なものらしい。一體煩惱心には、そんなに澤山な種類があるのであるか。

答。 佛家は可なり誇大な言擧げを好む。五十六億七千萬年、十萬億土……等々。又其の經典の如きものは、八萬四千にも上るといはれ、それを一々取上げた日には、一生かゝつても足りるものではない。問題の百八煩惱の如きも、亦その類である。煩惱は序論に述べた通り、一つの心たるに過ぎず、其の心が時々刻々に移つて行くのを、大袈裟に百八煩惱などゝいふのである。

序論の幾何學的考察に於て、人の心は、普通動搖しつゝあるものなることを知つた。心の動搖とは心がいつも一定不變なものにあらずして、時々刻々變化すといふことである。而して一晝夜は、子丑寅卯……等の十二時、一時は之を九分して刻といふ。故に一晝夜は之を刻にて數ふれば、百八刻となる。心なるものは時々刻々移りつゝあり、移りつゝある心は煩惱心に外ならぬから、百八煩惱とは、刻々移るところの心といふことに外ならない。そしてそれを表徵したものが珠數である。珠數の珠は、百八箇あるを正常とし、珠は心の表徵であるが、それが一つの輪となつてゐるのは、如何に心が時々刻々移るとはいへ、遂にそれは一つの心であることに相違はない。此く考ふれば珠數は可なり巧妙なる構想から出來たものといへる。が、其の眞の意味が分らぬが最後、單なる形式品としてのみ殘ることであらう。

上述の如く一晝夜は十二時、一時は九刻であつて、百八煩惱とはそれから來たものであることを說いたが、序でに時に關する二三の說明を附け加へることにしよう。

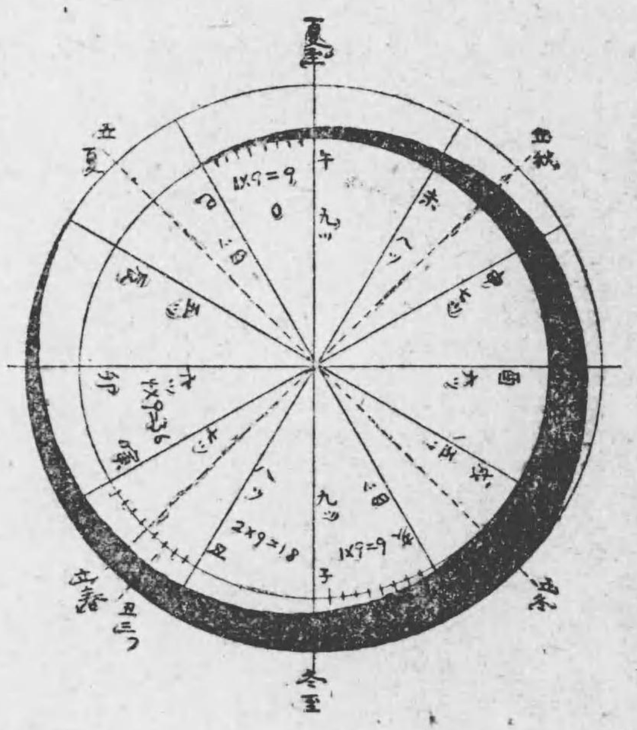
世間でよく丑三つ時といふことをいふが、丑は午前二時、三つとは三刻をいひ、一刻は今の

時計で十三分二十秒に該當するから、丑三つ時とは午前二時四十分となる。何故に此の二時四十分が問題視せられるか。その解釋の前提として次の考察を行ふ。

先づ任意に一つの圏を畫く。此の圓周を十二等分し、圖の如く之に子丑寅卯……等の符號をつける。此の十二等分されたる一劃が一時を示し、更にそれを九等分すれば、それは一刻を示すことになる。

次に此の圏よりも、少しく大なる圏を畫き、之も十二等分して、一年十二ケ月を示すものとし、之を前の圓と重ねるのである。其の法は、太陽一ケ年の位置と、一晝夜の位置とが、相重なるやうにする。即ち子と冬至と、午と夏至とが一致するやうするので、圖に示す通りである。此くして丑と寅との中間が立春、辰と巳との中間が立夏、未と申との中間が立秋、戌と亥との中間が立冬となる。

此くしたところで、更に考へを進めて行くことは、晝間は大體陽、夜間は大體陰であるといふことである。そして一年なれば、春と夏とは大體陽、秋と冬とは大體陰であることの目安を立てる。然るときは、陽の最盛期は春と夏との中間、陰の最盛期は秋と冬との中間であることを決定し得る。それは立夏と立冬とであり之を一日にすれば、午前九時と、午後九時とである。



さて陰陽の氣なるものは、自然に推移するものなるを以て、陰の氣を示すに黑を以てすれば陰陽推移の狀況は、見る通り之を圖に畫き得る。

此の圖に就いて見れば、陰陽の氣の相半ばするところは、立春と立秋、方位にすれば東北と西南、時刻にすれば、午前三時と午後三時であることが分る。

序でながら、鬼門といふことについての考へ方を述べよう。鬼門とは、邪鬼惡魔などの侵襲し來る口であるといふのであらう。そして此等が襲ひ來るが爲には、何等かの間隙あることを要する。そし

て其の間隙とは、陰陽の氣の間隙であるべきこと言ふ迄もない。

陰陽の氣の何れかゞ勝つて、それが自然に推移する時には、勿論間隙などはない。然るに或は陰、或は陽、陰陽相半ばして一進一退、踟蹰する時には、そこに間隙を生ずることになる。そしてそれは東北と西南、立春と立秋、午前三時と午後三時とである。是れが所謂鬼門である。鬼門とは元來陰陽の氣の間隙——鬼の乘ずる入口であるが、人は此の入口を有形的に塞いで、邪氣の襲來を防がんとしつゝある。尤も有無は相通ずるの理により、是れも一つの方法であるには相違ない。が、人を犯すものが、必ずしも鬼門とか裏鬼門とかよりするものでないこと勿論で、襲來者の方からして、その方向なり時刻なりが、單に便宜であるといふに過ぎない迄である。

尙丑三つ時とは、前に述べた通り、午前二時四十分である。午前三時になれば、或は陰、或は陽ともなるので、陰の氣の必ず勝つことを保證し得るは、その二十分前の丑三つ時であるといふ意味なのであらう。凡そ陰の氣に乘じて襲ひ來るものがあるとして、丑三つ時は、それ等に對しての、所謂締切り時刻なのである。

凡そ陰の氣の確定的に勝つて居るのは、七つ下り(午後四時過ぎ)からであるが、此の七つ下りから丑三つ時に至る迄は、約六時もあつて、陰の氣に乘じて襲ひ來るものにとりて、可なり時間的餘裕がある譯である、が、如何なる事でも、締切り時間切迫せねば殺到せぬのを常とし此の來襲者も、締切り時刻の丑三つ時、一時に殺到すといふことであるらしい。それが、丑三つ時を、陰の極でもあるかの如く思はしめることになつたのであらう。但し今こゝで、來襲者が有るか無いかといふことを論じようとするものではない。そして丑三つを丑滿などゝ書くことの誤りであることを、序でながら指摘して置く。

此の圖について、尙述べんとすることあるも、餘りに煩瑣とならんことを恐れて、之を略することにするが、唯時の起點は、陰中陽が萠し、陽中陰が萠す時であることを述べて置かう。それは午後十時と、午前十時とである。此くて正子と正午とが此の起點から數へて九刻となり、普通之を九つと呼び慣はして居る。從つて丑と未とは十八刻、寅と申とは二十七刻、以下順に三十六刻、四十五刻、五十四刻となる。が、普通、十、二十、三十……等は之を略して、單に八つ、七つ、六つ……等といふ言ひ慣はしになつて居る。

以上問答は、或る事柄を捕へて、それから論旨を進めたものである。その結果、古事記と遠

さかつた箇所を生ずることにもなつた。併しながら古事記は、要するに生命の記載であるから、之を現代觀から眺め、その側面描寫を試みたからとて、強ち無益の業であつたとは思はない。筆を擱くに當り、右一應お斷りする次第である。

昭和十八年十一月廿五日印刷
昭和十八年十一月二十一日發行

非賣品

著作者　淺野正恭
發行者　東京都大森區南千束町一五九番地　脇長男
印刷者　東京都四谷區三榮町九番地　吉野實

ШШ
103

終